

大木系土器の受容傾向

- 円筒土器と大木系土器の共伴事例から -

坂本真弓

1 はじめに

円筒上層e式が円筒土器の範疇に含まれることは多くの先学者が認識し、指摘していることである（村越1974、三宅1989）。しかし、これとは異なる見解もあり、円筒土器本来の伝統が崩れた「円筒上層e式以降」を大木系土器とし、「円筒土器の概念」について論じているものもある（鈴木1982・1998・1999）。確かに、大木式土器の特徴は、円筒上層d式とe式の型式設定の際にも反映され、沈線文の導入という「施文手法の変化」が両型式の境界となって表れている。このことを踏まえ、大木式土器と円筒土器の関わりについて見るために、県内の大木系土器と円筒土器で共伴関係が明確に分かっている事例を取り上げ、「大木系土器要素」と「円筒土器の伝統的手法」の傾向を探る。

2 共伴関係事例の抽出

青森県内の大木系土器（大木7b・8a式併行期）の土器が出土している遺構を抽出し、次のような条件をつけて共伴事例を選別した。

共伴する円筒土器は、器形や文様構成がある程度復元されているもの。「覆土」「堆積土」のものは出土地点と出土レベルが不明なものは使用せず、同一層位のもの・床直・床面出土のものを使用する。いわゆる「接触土器」のような円筒土器と大木系土器とを比較できないものは除く。同一層位のものでも文様の入っていないものは除く。以上のような条件を加えて抽出された共伴事例は7例確認された。

富ノ沢（2）遺跡（六ヶ所村）第6号住居跡（図1-1～3）

報告書には復元図3点、破片図9点の計12点が掲載されている。出土層位別にみると、床面3点、床直1点、1層1点、フク土5点である。復元図3点はほぼ完形の個体が押し潰されたような状態で、住居南西壁前の床面付近から出土しており、住居跡は出土遺物から円筒上層d式期の住居として報告されている。

松ヶ崎遺跡（八戸市）第19号住居跡（図1-4～10）

報告書では復元図21点、破片図8点の計29点が掲載されている。出土層位別にみると1層7点、2層9点、3層10点、床2点、ピット1点である。住居跡内の堆積状況は人為堆積と考えられ、遺物は「住居廃絶後に投棄されたような状態で…出土した。」とあり、住居内の埋め戻しが行われたと考えられる。ただ、埋め戻しの頻度を確認するのは困難なため、遺物は層位ごとに取り扱うこととした。住居跡は出土遺物から円筒上層d式期以前と報告されている。大木系土器の出土した層は2層と床面であり、この2つの層内の遺物を図示している。

三内丸山（6）遺跡（青森市）第60号住居跡（図1-11～14）

土器は1385点出土し、このうち復元図10点、破片図13点の計23点を掲載している。掲載されている図を出土層位別にみると、ピット2から4点、床面1点、1層4点、2層1点、3層3点、4層1点、

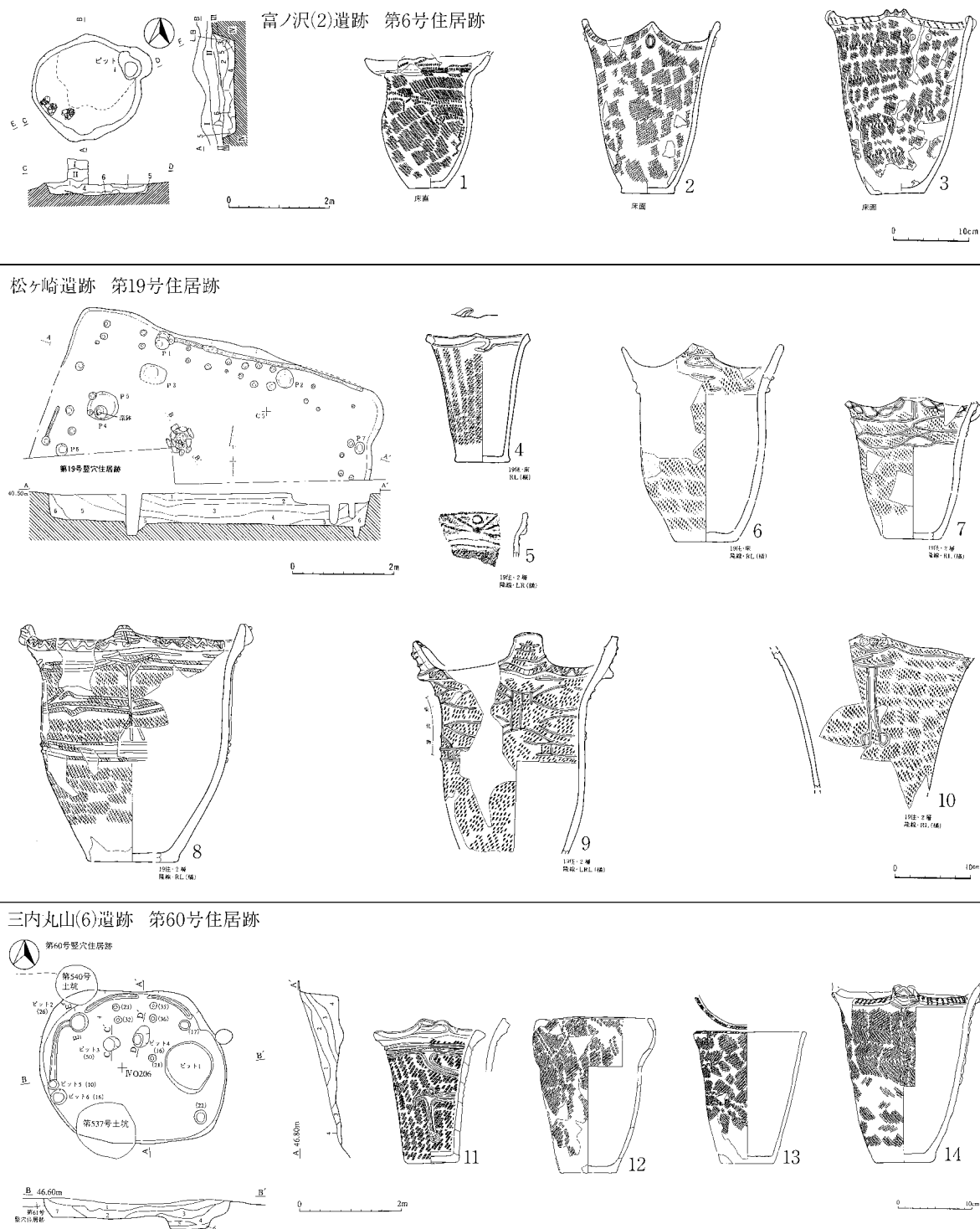
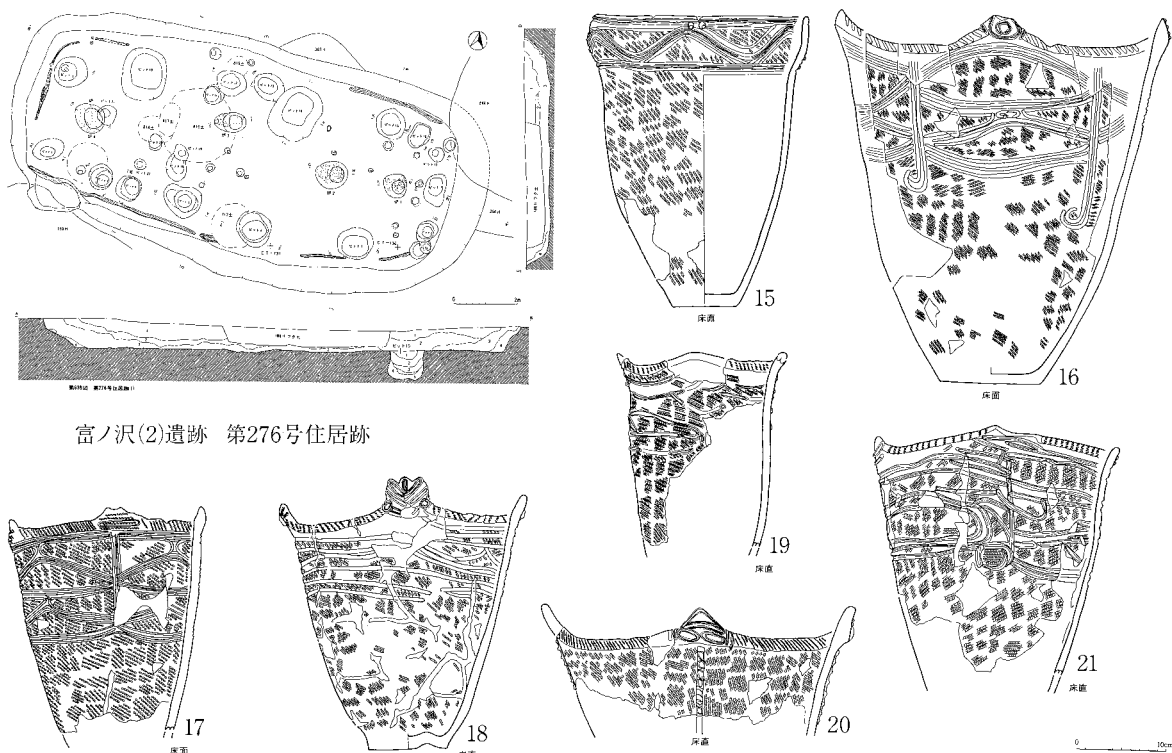


図1 共伴事例1

他堆積土9点である。住居跡の北西壁際にあるピット2内に計3個体、これらの土器の直上から1個体の計4個体が出土している。住居跡は出土遺物から円筒上層e式期と報告されている。

富ノ沢(2)遺跡(六ヶ所村) 第276号住居跡 (図2 - 15~21)

報告書には「住居跡中央部から多く出土した。」とあり、このうち復元図22点、破片図20点の計42点が掲載されている。出土層位別に見ると、床面6点、床直19点、3層1点、フク土16点である。住居



富ノ沢(2)遺跡 第216号住居跡

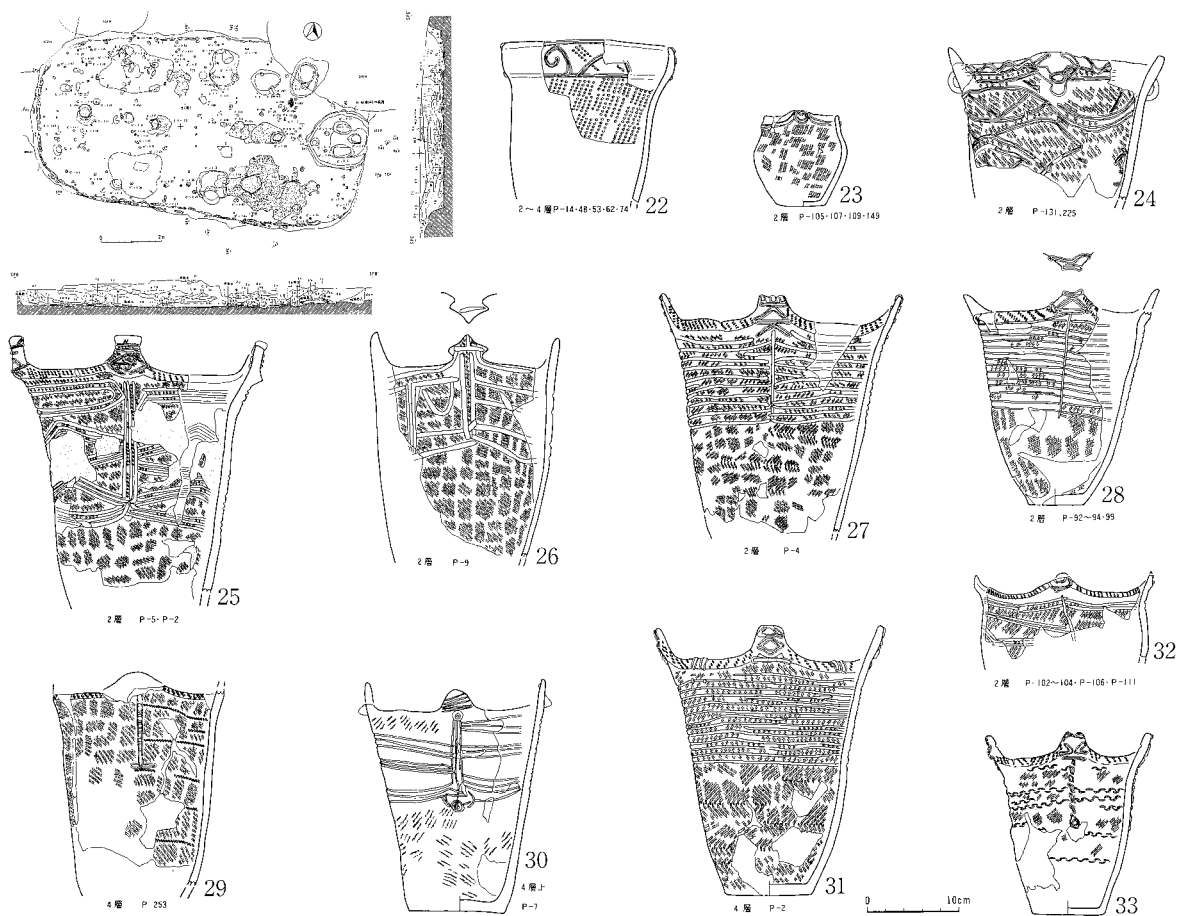


図2 共伴事例2

内の堆積状況は「自然堆積と思われる。」と報告されており、ここでは床面・床直の復元図6点を扱う。住居跡は円筒上層e式期と報告されている。

富ノ沢(2)遺跡(六ヶ所村) 第216号住居跡(図2-22~33)

報告書には「覆土中から多量の土器が出土した」とあり、このうち復元図24点、破片図39点の計63点が掲載されている。出土層位別にみると、床面1点、床直1点、1層1点、2層27点、3層2点、4層22点、5層1点、フク土4点、その他4点である。住居跡は円筒上層e式期と報告されている。大木系土器は2~4層中で出土しており、この層位の遺物を10点選別したが、これらの資料を扱う際には次の点に留意した。本住居内からは床面直上で多量の炭化材が出土しており焼失家屋の可能性もあるため、この上下の遺物は同列に扱わないこととし、また、本住居跡が完全に埋まりきるまでの堆積状況を確認するのは困難なため、準事例として扱う。

泉山遺跡(三戸町) 第22号住居跡(図3-34・35)

報告書では、復元図1点、破片図3点の計4点が掲載されている。出土層位別にみると、埋設土器1点、床直1点、フク土2点である。住居跡内の堆積状況は自然堆積と考えられ、埋設土器は住居跡南側中央周溝側で倒立状態で検出されている。出土遺物から円筒上層e式期と報告されている。

泉山遺跡(三戸町) 第1号フラスコ状ピット(図3-36~52)

報告書では復元図21点、破片図23点の計44点が掲載されている。このピットの堆積土中位から下位にかけて多量の土器とともに、石器類、土偶、骨角器、クリ・クルミの炭化物・獣骨などもみられ、廃棄場所や炉として機能していた可能性がある。遺物の接合状況から遺物の廃棄等が行われたと考えられる。

3 円筒土器と大木系土器の属性

これらの大木系土器の影響が具体的にどのような形で浸透していったのかを探るために円筒土器を個々の属性に分けて、その影響の度合いを測るために円筒土器38個体、大木系土器11個体、折衷土器1個体の計50個体の深鉢形土器を、次のように項目ごとに分類した。(浅鉢形・鉢形土器は含めていない。)

円筒土器(表1・表2)

器形 - 波状口縁と平口縁がある。波状口縁は突起のあるものを含み、形態から3つに分類した。

- 波状 1 いわゆる「バケツ形」のもので、底部から口縁部にかけて緩やかに開くもの。
2 胴部中央付近で緩やかに張るもの。土器の最大径は口縁部にくるものが多い。
3 口縁部の傾きが直線的もしくは内湾気味になり、胴部からの連続したカーブを持たないもの。
4 底部から口縁にかけて大きく開きラッパ状になるもの。

口縁部

突起 形態・突起直下の文様・突起部分の主文様構成・施文技法などから分類した。

- 形態 1 三角形基調のもの 2 方形基調のもの 3 台形基調のもの 4 円形基調のもの 5 十字形のもの
6 波状のもの

突起直下 1 ボタン状の文様がつくもの 2 横位の粘土紐がつくもの

- 文様構成 1 横位直線 2 楕円形基調のもの 3 三角形基調のもの 4 菱形 5 渦巻文基調のもの
6 意匠系(動物・人面) 7 無文

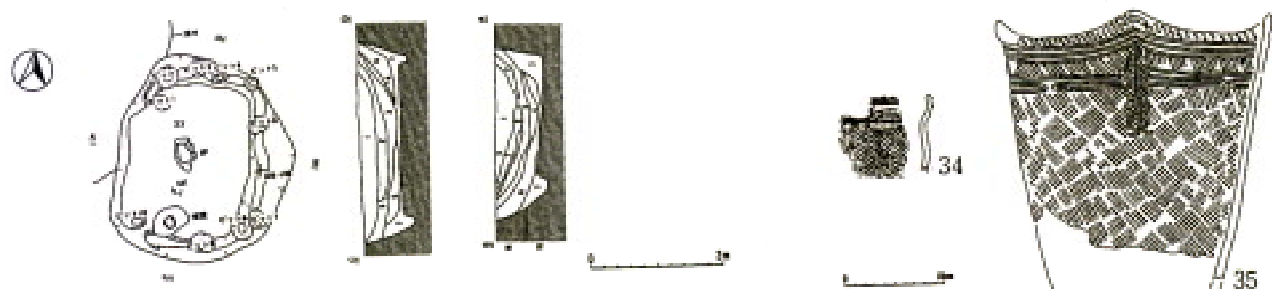
施文技法 1 粘土紐を貼付るもの 2 粘土紐貼付後に別に施文するもの 3 地文縄文を回転施文するもの
4 沈線 5 縄文を押圧するもの

口唇部 突起以外の口唇部施文技法から分類した。

- 1 縄文を押圧するもの 2 粘土紐を貼り付けるもの 3 地文縄文を回転させるもの 4 棒状工具による
刺突・沈線のもの

胴部

地文縄文 回転方向と原体の種類で分類した。



泉山遺跡 第22号住居跡

泉山遺跡 第1号フラスコ状ビット

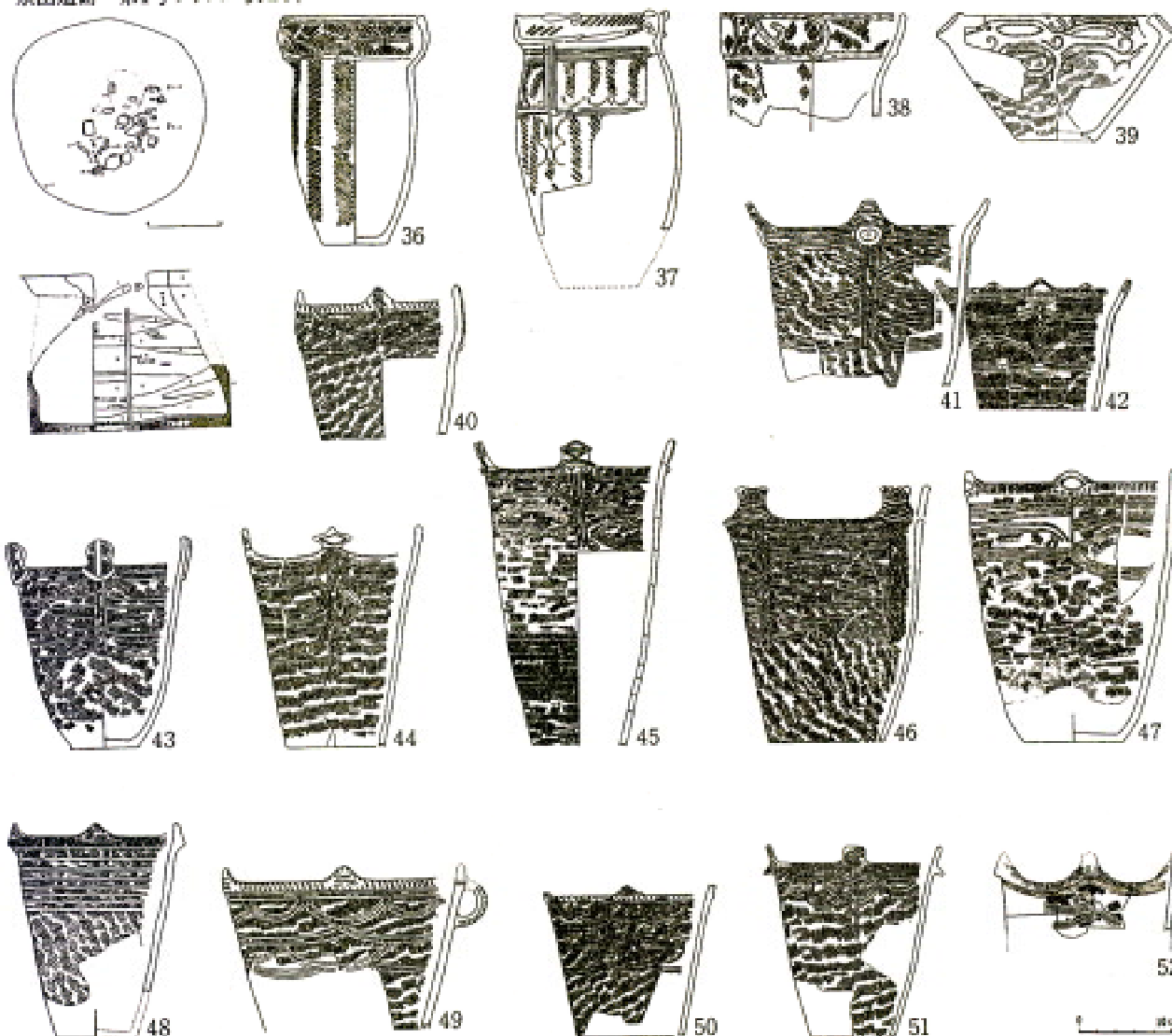


図3 共伴事例3

横位 1 単節縄文 2 結束縄文 3 結節縄文 4 無節縄文 5 複節縄文

縦位(斜位含む) 1 単節縄文 2 複節縄文 3 合撚縄文

文様構成 胸骨文とこれ以外の文様、施文技法で分類した。

胸骨文 中心線 1 中心線2本 2 中心線1本 3 中心線3本

中心線周辺 1 中心線から延びる上下2つの曲線を1単位とするもの 2 これ以外のもの

胸骨文以外のもの 1 曲線を基調とするもの 2 横位直線を基調とするもの 3 渦巻文が含まれるもの

4 横位と縦位の直線で構成されるもの

施文技法 1 粘土紐貼付後に刺突を施文するもの 2 粘土紐を貼り付けるもの

3 粘土紐貼付後に地文縄文を回転施文するもの 4 沈線

大木系土器(表3)

器形-1 キャリバー形のもの 2 口縁部が直線的か外側に開くもの

口縁部 - 文様構成と施文技法で分類した。

文様構成 1 横位の直線と弧状文で構成されるもの 2 円形文と横位の直線文で構成されるもの 3 弧状文で構成されるもの 4 山形文で構成されるもの 5 渦巻状文で構成されるもの

施文技法 1 隆線による施文 2 縄文押圧による施文

胴部 - 文様構成と地文縄文で分類した。

文様構成 1 縦位・横位の直線と波状文で構成されるもの。 2 横位の直線と波状文で構成されるもの 3 縦位・横位の直線と渦巻文で構成されるもの 4 文様構成のないもの

地文縄文 縄文原体の回転施文方向で分類した。

縦位 1 単節縄文 2 無節縄文 横位 1 単節縄文 2 無節縄文 3 複節縄文

4 土器の各属性観察

円筒土器

器形 円筒土器は基本的に底部から緩やかに立ち上がる器形を維持している。住居跡事例では大木 7 b 式併行土器と共伴した図 1 - 2・3 と大木 8 a 式併行土器と共伴した図 1 - 13・14 が大木系土器の共伴例があるにも関わらず、円筒土器の伝統を維持している。胴部が張る例は図 1 - 6・8・9 ですでに存在し、上層 e 式期をとお試しみられる。口縁が直線的にもしくは内湾気味に立ち上がるもの（図 2 - 17・25）、ラッパ状に開くもの（図 1 - 10）も少数例存在する。

口縁部突起 主体を占めるのは三角形と方形で、文様構成は横位の直線を用いるものが各事例とも最も多く、楕円形基調・三角形基調のものがこれに続く。施文技法は圧倒的に粘土紐貼付が多く、これは円筒上層 d・e 式を問わず見られるものである。これ以外にも貼付後に縄文原体の押圧、縄文原体の回転施文、刺突施文など、貼付を基調にしたものが目立つ。

口唇部 縄文原体による押圧が多数を占める。縄文原体回転施文は、地文縄文を施文する際にそのまま口唇部付近を施文している。このほかに、粘土紐貼付や棒状工具による刺突・沈線文などが少数例みられる。

縄文原体の種類 単節縄文が主体を占める。結束縄文が少数例みられるが、複節縄文に比べれば頻度が高い。

回転施文方向 横方向の施文が半数以上であるが、円筒上層 e 式期には縦方向のものもみられる。円筒上層 d 式期には縦方向の施文はほとんどみられない。

文様構成 波頂部から垂下する中心線とここから上下に延びる曲線をもつものを胸骨文とし、これ以外の中心線から延びる曲線が崩れたもの、中心線のみ残存したもの、中心線のないものとの比較を行った。円筒上層 e 式期に顕著にみられる胸骨文だが、割合では 35 例中 8 例と少なく、むしろ、胸骨文から派生したものや中心線のない文様構成が目立つ。

文様施文 円筒上層 d 式と e 式を分ける最も大きい要素である。中心線とこれ以外の文様技法をわけて各々分類している。当然ながら、松ヶ崎遺跡例のように円筒上層 d 式としたものには、粘土紐貼付の技法が使用され、円筒上層 e 式期とした共伴例には、ほとんどが沈線による技法が使われている。この中で特徴的なのは、円筒上層 e 式期にも中心線には粘土紐と円形刺突の施文技法が使用される点である。これは、図 3 - 42 にみられるように、中心線の周囲が地文縄文施文のみでも残存するようである。

大木系土器

器形 大木 7 b 式併行期の一例は口縁部が外に向かって水平に広がったあとほぼ真っ直ぐに立ち上が

番号	胴部			文様構成			文様施文			中心線の周辺		
	地文縄	横位	縦位・斜位	胸骨文			中心線			中心線の周辺		
				単節	結束	結節	無節	複節	複節・斜位	合燃	貼付+円貼	貼付+縄文回転
2												
3												
6												
7												
8												
9												
10												
13												
14												
16												
17												
18												
19												
20												
21												
24												
25												
26												
27												
28												
29												
30												
31												
32												
33												
35												
41												
42												
43												
44												
45												
46												
47												
48												
49												
51												
52												

表1 円筒土器属性表

番号	器形	口縁部					胴部				
		突起	文様				施文		文様		
	キャリパー形が外に開く		横位文と弧状文	円形文と放射状文	弧状文	山形文	渦巻状文	隆線 押圧	縦横位文と波状文	横位文と波状文	縦横位文と渦巻文
									なし	縦位・斜位	横位
										単節 無節	単 無節 複節
1		-									
4		-								間隔	
5		-									
11		-									
12		-									
15		-									
22		-									
34		-									
36		-								間隔	
37		-								間隔	口縁
38		-								胴	口
40		-									

表3 大木系土器属性表

るものである。県内で確認される大木8 a式併行期の土器はキャリパー形のものが最も多い。この他、底部から口縁部にかけて大きく開く図1 - 4・11も見られる。

口縁部の文様構成・施文技法・S字状突起 大きくわけて、山形文や弧状文に見られる緩やかな曲線を繰り返すものと端部が渦巻き状になるもの、横位の文様と弧状・円形文を組み合わせるものがある。施文技法には粘土紐を張り付けた後にその両側縁を丁寧に加工する隆線技法と縄文原体を押圧する技法がみられる。山形文は大木7 b式併行の口縁部直下に見られる文様であり、大木8 a式併行土器の図1 - 12にみられる山形文に後続する可能性がある。この山形文は図2 - 15のように弧状文へと変化すると考えられる。また、図2 - 22、3 - 36～38に渦をまく手前で完結している渦巻状文がみられる。この渦巻き状文は大木8 b式併行のキャリパー形土器の口縁部文様に構成される渦巻文の前段階のものと思われ、横位・渦巻き状の文様構成（図3 - 36～38）から、全体的に曲線を描く渦巻状文（図2 - 22）に変化する可能性があると考えられる。このほか、図1 - 4・11の口縁部にみられるS字状突起は大木8 a式土器にみられるものである。

胴部の文様構成・地文縄文 胴部に構成される文様はほとんどなく、縦位文・横位文と波状文が渦巻き状文で構成される3例のみである。地文縄文は単節縄文が使用されるものが多く、回転施文方向は横方向のものと縦方向のものが半々である。口縁部は横方向、胴部は縦方向の回転を施すものも2例みられる。また、大木式土器に特徴的な縦方向に施文する際に原体と原体の間隔を規則的にあける帯状縦位文（稲野1991）の技法も見られる。

5 大木系土器の変遷と円筒土器の共伴関係

今回取り上げた大木系土器の変遷を属性の観察結果から3段階に分類した。大木式土器の変遷については、丹羽編年（丹羽1989）を参考にした。

第1段階 大木7 b式期

第2段階 大木8 a式期 キャリパー形土器の口縁部が山形文・弧状文で構成されるもの

第3段階 大木8 a式期 キャリパー形土器の口縁部に渦巻き状文がみられるもの

円筒土器の共伴関係 今回述べる円筒土器の特徴はあくまでも共伴関係事例からのまとめであり、地域差や時期差を考慮していない。

第1段階 富ノ沢（2）遺跡第6号住居跡例：共伴事例をみると、この段階の円筒土器は器形・地

文縄文とも前型式の属性を受け継いでいる。ただし、共伴例以外の円筒上層d式土器には、胴部の張る器形が多く見られ、前型式から受け継いだものかどうかの判別は難しい。文様構成は不明である。

第2段階 松ヶ崎遺跡・三内丸山(6)遺跡・富ノ沢(2)遺跡第276号住居跡例：松ヶ崎遺跡の共伴事例の円筒土器はd式土器が主体だが、共伴した大木8a式併行の土器片(図1-5)と図1-4・11の器形からここに含めた。円筒土器の器形は図1-4・11に類似したラッパ状に口縁が大きく開く例が見られ、円筒上層d式期には大木系土器の器形を受容していたと思われる。円筒土器の口縁部は、突起が三角形状で粘土紐貼付による横位沈線文構成のもの、口唇部には縦方向の縄文原体押圧施文が主体的である。この傾向は第3段階まで続く。突起の文様構成には、ほかに意匠系のものもみられる。胴部の文様構成は、上層d・e式期土器に特徴的ないわゆる「胸骨文」的な文様構成は少なく、これから変化した文様が多くみられる。これに比べて、施文技法は沈線が圧倒的に多く、上層e式土器においての沈線文受容の変化は他要素の傾向と比較しても大きな違いがある。縄文原体は単節縄文が主体を占めるが、結束縄文も使用される。縦位の回転施文は松ヶ崎遺跡例の円筒上層d式土器には見られず、円筒上層e式土器には使用され始めている。

第3段階 富ノ沢(2)遺跡第216号住居跡・泉山遺跡第22号住居跡・第1号フラスコ状ピット：泉山遺跡第22号住居跡例の大木8a式併行土器片(図3-34)は口縁部の文様構成が明確でないが、横方向の文様は後続の渦巻文と組み合わせられて使用されることが多いため、ここに含めた。円筒土器の器形は第2段階に引き続き胴部の張る器形と底部から緩やかに立ち上がる器形がみられる。円筒土器口縁の突起は三角形状が主体的ではあるが、バリエーションが多くみられ、方形・台形・円形・十字形のものなどがある。突起の文様構成も同様の傾向で、横方向の直線文のほかに楕円形・三角形文・菱形文・渦巻文等がみられ、これらを組み合わせて使用する例もみられる。口唇部の施文技法は縄文原体押圧のほかに沈線・粘土紐貼付・地文縄文を回転施文させた手法もみられる。円筒土器胴部の施文技法・地文縄文等は第2段階と大きな変化がみられない。円筒土器の胴部文様構成は、富ノ沢(2)遺跡第216号住居跡例と泉山遺跡第1号フラスコ状ピット例での大木系土器の共伴事例から、円筒土器に当てはめると曲線的な胸骨文・弧状文の文様構成から直線的な胸骨文・横位文へと変化する可能性がある。ただし、この富ノ沢(2)遺跡例は、共伴事例としては準事例として扱うものであり、今後の検討が必要かと思われる。

6 まとめ

大木系土器要素の受容をまとめてみると、次のような傾向がみられる。

大木系土器で第1・2段階に表れていた縄文原体押圧技法は円筒土器での受容が第3段階にみられる。今回の事例でもこの施文技法が円筒土器にみられるのは1例のみで積極的な導入は行われなかったものと考えられる。大木系土器で第1・2段階に表れた文様構成が円筒土器では同じく第2段階で表れている。胴部の文様モチーフでは波状・渦巻状文は早い段階から取り入れられているが、胴部の縦横位直線は円筒土器では1例のみにみられ、前述の縄文原体押圧施文技法と同様に積極的な導入がみられない。

	大木系土器	円筒式土器
胴部の縄文原体押圧施文技法	第1・2段階	第3段階
胴部の施文方向	第2段階	第2段階
胴部の波状・渦巻状文	第1・2段階	第2段階
胴部の縦横位の直線	第2段階	第3段階

この他、器形については前型式から胴部の張る土器がみられ、円筒上層d・e式土器内だけでその変化を述べるのは難しい。地文縄文については、円筒土器のほうで結束縄文から単節縄文への変化を追わなければ、大木系土器にも多用される単節縄文との比較はできないと考える。胴部の文様構成において、一般的に円筒土器では胸骨文が主体となるが、今回の大木系土器と共伴関係にある円筒土器は胸骨文から変化したものの割合が多く、これが時期・地域差に起因するものなのかの検討が必要と考える。胴部の文様では円筒上層e式の段階でも一部使用される粘土紐貼付の技法についての今後の検討が必要であると考えが、これが大木系土器の影響によるものかどうかははっきりしなかった。

今回は、大木系土器と円筒土器の共伴事例のみを検討したが、円筒土器同士の共伴事例や遺構の重複関係を含めることができれば、円筒土器の変化と対応させることがより可能であったかもしれない。繰り返すが、少数の共伴関係事例からの傾向を述べており、他の共伴事例も含めれば違った結果が導き出される可能性もあるとみられる。また、県内の事例では八戸市石手洗遺跡があるが、時間の制約上掲載出来なかった。

註) 大木式土器と大木系土器 - ここでは、大木式土器はいわゆる東北南部を中心とした土器型式全般を指し、大木系土器は、県内で見られる大木式併行期といわれる大木式土器の影響を受けたものの総称を指すこととし、円筒土器のなかに大木式土器の影響が若干みられるものは除外する。

引用・参考文献

- 市川金丸ほか1978『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集青森県教育委員会
- 稲野彰子1991「大木式土器にみられる球胴形深鉢について - 文様の多様性に注目して - 」『北上市立博物館研究報告』第8号
- 酒井宗孝1998「岩手県北部における縄文時代中期の土器様相」『紀要』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鈴木克彦1982「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』第7号 1996「泉山式土器」『日本土器事典』1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 1999「東北地方 中期(円筒上層式)」『縄文時代』第10号 縄文時代研究会
- 成田滋彦2000「円筒上層式に於ける大木7b・8a式について」『村越潔先生古希記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室OB会
- 成田滋彦ほか1992『富ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集 青森県教育委員会 1995『泉山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集青森県教育委員会 2001『三内丸山(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第307集 青森県教育委員会
- 丹羽 茂1989「中期大木土器様式」『縄文土器大観』第1巻 小学館
- 三宅徹也1989「円筒土器上層様式」『縄文土器大観』第1巻 小学館
- 村木 淳1994「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集 八戸市教育委員会
- 村越 潔1974『円筒土器文化』雄山閣